

## 大通公園を望む窓辺から

### いじめ防止対策

常任理事 三戸 和昭

いじめの防止などのための対策を総合的、効果的に進め、児童生徒の尊厳を守ることを目的に「北海道いじめの防止等に関する条例」を平成26年4月に施行した。「いじめ」とは、一定の人的関係にある他の児童生徒が行う心理的または物理的な影響を与える行為で、その行為を受けた児童生徒が心身の苦痛を感じているものをいう。

いじめ防止のための対策とは、いじめの未然防止、早期発見および早期解消などの取り組みのことをいう。いじめ発見のきっかけは、アンケート調査など学校の取り組みによるものが最も多く、本人からの訴え、学級担任が発見と続く。平成20年度から平成24年度の北海道の学校におけるいじめの認知件数は、約3,000から5,000件である。主ないじめは、冷やかしかからかい、仲間外れ、叩く、蹴る、金品をたかる、隠すなどである。

いじめの防止対策として、児童生徒を対象としたアンケート調査などいじめの実態把握、いじめ相談電話の設置など教育相談の充実、中1ギャップ問題など未然防止に向けた事業などや啓発活動などがある。これらの対策により、いじめが深刻化する前に、早期に発見され、解消されたため、いじめの解消率は、平成20年度は88%であったが、年々上昇し平成24年度は96%になる。しかし、解消されていないいじめが数%あり、これらの対策が大きな問題である。ネットいじめなどいじめの形態の変化、いじめが発生する社会の多様化があり、学校と保護者の対応では解消できず、地域住民や医療機関など関係機関の理解と協力を得た取り組みの充実が必要である。

すべての人は長所と欠点を持っている。欠点を非難するのではなく、なるべく長所を認めて褒めることでいじめの解消が図られることを願っている。

### ワールドカップ

理事 恩村 宏樹

4年に一度のサッカーの祭典、ワールドカップブラジル大会が、ドイツの優勝で幕を閉じた。南米での開催では、南米のチームが圧倒的に有利というデータを覆しての見事な優勝だった。ドイツはボールの支配力に長け、攻守のバランスのとれた素晴らしいチームだったと思う。惜しくも延長戦の末、準優勝になったアルゼンチンは、2006年のドイツ大会、2010年の南アフリカ大会に次いで、3大会連続でドイツに屈したことになった。しかし、決勝トーナメントでの失点は、ドイツ戦での1点のみといった堅い守備力は称賛に値すると思う。

優勝候補筆頭の開催国ブラジルは、準決勝でドイツに、3位決定戦でオランダに歴史的な大敗を喫した。ネイマールの負傷欠場が大きく影響したことは間違いないが、開催国というプレッシャーが個々の選手に重くのしかかっていたことも事実であろう。結局、日頃陽気で明るいブラジル人が併せ持つメンタル面での弱さが敗因の一つになったと感じた。

わが日本といえば、戦前の予想を大きく裏切り、予選リーグ、1分2敗の最下位で終わった。初戦のコートジボワール戦のキックオフは、くしくも、北海道医師会代議員会の開会時間と重なった。会の途中で、本間議長から、「ただ今、日本が1点先制しました」という、異例の報告があり、議場は大いに盛り上がった。しかし、蓋を開けてみれば、1-2の逆転負けだった。大会を通して、日本チームに戦う姿勢が少し欠けていたのではないかと感じたのは私だけであろうか。私個人としては、1-4と大敗したが、最後のコロンビア戦が、一番攻撃的に見えた。あくまでも挑戦者としてぶつかっていくという心構えが大切だったのではないかと思う。

日本チームのこれからの成長と、4年後のリベンジを期待しながら、応援を続けていこうと思う。

